

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00502

研究課題名(和文) 共同作業としての作品—17-18世紀フランス文学における地下文書・匿名・思想論争

研究課題名(英文) Oeuvre comme un lieu de travail commun - manuscrit clandestin, anonymat et debat d'idees dans la litterature francaises des XVIIe et XVIIIe siecles

研究代表者

藤原 真実 (FUJIWARA, MAMI)

東京都立大学・人文科学研究科・教授

研究者番号：10244401

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：17-18世紀フランスの文学の中に、共同作業としての作品の概念、集団としての作者が時間をかけて作り上げる共有物としての作品の概念が存在したという仮説を立て、これを証明するため、哲学的地下文書については計量文献学を援用して著作物の中に複数の書き手が存在することを明らかにし、また印刷された著作物については匿名の第二、第三の筆者が作品と対話し作品を変容させていく過程に光を当てた。その結果、著作物を単独の作者の専有物と見做す近代以降の一般的な考え方は異なる作者観、作品観が17-18世紀に存在したこと、そのようにして共有される作品の内部で起こる対話が啓蒙主義の原動力の一つになったことを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

一人の作者を作品の独占的所有者と見做す著作権の概念は、いつの時代にも存在した真理のように想像されがちであるが、フランスでは革命期に成立し、19世紀以降に確立・普及した歴史の浅い概念でしかない。今日インターネットや人工知能などの情報技術が人間の活動を急激に変容させている中で、その概念はすでに大きく揺らぎ、再検討を求められている。しかし社会制度は依然として旧来の概念を踏襲しており、制度と実態の乖離は顕著である。著作権が存在しなかった時代の自由な著述活動のあり方を明らかにした本研究は、現代の著述活動のあり方を再考する上で、大いに参考となるはずである。

研究成果の概要(英文)：To prove that, in 17th and 18th century French literature, there existed the concept of a work as a collective effort, that is, a work as a common object created by a group of authors over a long period of time, I analyzed the clandestine philosophical manuscripts using the method of stylometric analyses, and showed the existence of plural writers in the works. I also worked on printed works and shed light on the process by which an anonymous second and third writers interact with the work and transform it. As a result, I elucidated that, in the 17th and 18th centuries in France, there existed a peculiar conception of a work in which a work is regarded as an exclusive property of a single author, and I suggested that the dialogue taking place within the shared works was one of the driving forces behind the Enlightenment.

研究分野：18世紀フランス文学

キーワード：地下文書 啓蒙思想 匿名 共同執筆 計量文献学 間テクスト性 作品 思想論争

1. 研究開始当初の背景

本研究代表者は、野沢協監訳『啓蒙の地下文書Ⅱ』(法政大学出版局、2011年)の翻訳者の一人として、哲学的地下文書を代表する著作『宗教についての異議』を担当し、その写本の中で最もオリジナルに近いとされるミュンヘン草稿を底本として翻訳を行った。その過程で、筆者の複数性を示唆する多数の箇所を発見、『宗教についての異議』のテキストの中で複数の筆者の存在を検証する可能性を垣間見るに至った。しかし、フランスをはじめとする欧米の研究界では、1982年にフレデリック・ドロツフルがロベール・シャルルを『宗教についての異議』の唯一の著者と宣言して以来、それに異を唱える研究者は少なかった。1993年にはアントニー・マッケナがシャルル以外の作家の痕跡を指摘したが(A. Mackenna, « Questions sur l'attribution des *Difficultés* », *Autour de Robert Challe*, p. 243-256)、シャルル研究界で激しい対立を招き、以来、この問題はフランスのロベール・シャルル研究ではタブー視されてきた。藤原は翻訳『宗教についての異議』(2011年)に付した「解題」(1046頁以降)において、ロベール・シャルル以外の声が存在する可能性に言及した後、2015年にあらためてシャルル以外の筆者の存在を指摘する論文をフランス語で書き、地下文書の学術的研究誌 *La Lettre clandestine* (Classiques Garnier) に投稿した。しかし校閲者アルティガス＝ムナン氏から慎重論が出され、論文は前半のみ掲載された。その後、筆者の複数性を示す明証的な方法の必要性を感じていた折に、同校閲者から、計量文献学を研究方法の一つに取り入れることを提案され、計量分析の専門家フランチェスカ・フロンティーニ氏との共同作業が始まった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、『宗教についての異議』をはじめとする17-18世紀フランスの地下文書および印刷本それぞれの著作に複数の書き手が参加したことを明らかにし、それらの作者を同定することにより、当時の作者と読者が共有していたと考えられる著作物の概念、すなわち、決定版(édition définitive)のように固定化したものではなく、複数の匿名の書き手が次々と参加することにより変化し展開し続ける思想をその変化をも含めておさめもつ当時の著作物のありようを明らかにすることである。

フランスでは著作権の概念が革命期以降に確立し、著者と著作物の「一対一対応」の関係が一般化した。これまでのフランス文学研究においては、そのような近代的な概念をそれ以前の文学研究にも適用する傾向があった。17-18世紀フランス文学研究が往々にして一作品に一人の著者をあてがうことを優先させてきたのに対して、本研究は、そのような概念を取り払い、一著作のなかに混在する複数の筆者に光を当てることにより、作品の中で対話し論争する複数の作者の声を、いわばその生成と展開の中で捉えることで、そのような生き物としての共同作品のありようを明るみに出すことを目指す。

3. 研究の方法

本研究には以下の4つの方法を用いた。

①計量文献学・コンピューター言語学を用いた地下文書の分析

この分析方法を用いるためには、第一に、信頼性のあるテキストを探し出し、それをコンピューターによる分析に適した電子テキストに変換する必要がある。ロベール・シャルルの

著作については、ソルボンヌ大学内 CELLF16-18 の研究プロジェクト Observatoire de la vie littéraire (OBVIL) が準備したテキストファイルを特別に使用することができたが、比較の対象として必要となるその他の哲学的地下文書については、アントニー・マッケナとマリア＝スザナ・セガンが立ち上げたデジタル・アーカイブ « Plateforme philosophie clandestine » (2018～) で公開されている校訂されたテキストを利用した。

第二に必要な作業は、解析し数値化すべき要素の特定である。最近の研究 (F.Cafiero, J.-B.Camp, « La naissance du style : auteur vs genre aux XVIIe et XIXe siècles », Humanistica 2020) が指摘したように、19 世紀以前のフランス語のコーパスに計量分析を行った場合、ジャンル毎の類別はできるが、作家ごとの類別はきわめて難しい。この困難を乗り越えるために、既成の分析プログラムではなく、作家個人の統語的特徴、特徴的な語彙、綴り方等を見出し分析にかけるといった作業が必要となる。しかし、哲学的地下文書は次々に複数の書き手が書写した写本であり、印刷本であっても印刷業者や植字工が改変を加えることは 18 世紀には珍しくなく、分析作業は困難を極めた。

② 異本の比較対照による思想論争の考察

『宗教についての異議』の 2 種類の写本と、同著作を土台にして書かれ、刊行された『軍人哲学者』(1768 年) のテキスト内容を比較対照することにより、異本間あるいは一つの写本・刊本のなかにも、ローマ・カトリック、理神論、無神論の思想論争が展開していることを突き止めた。

③ 系列 (狭義の間テキスト性) 的アプローチ

シルヴァン・ムナンが提唱した系列的アプローチを援用し、17-18 世紀の妖精物語を分析する。古典古代以来の文学伝統の中で物語を書き継いで行く作者たちは、過去に用いられたのと同じテーマ、同じ筋をもとに、先行作品との対話と論争をとおして新たな物語を展開していく。この過程を一つ一つ跡づけ明らかにすることで、個々の作品の総体としての作品の共同制作に関わっている。このアプローチを採用することで、本研究は、17-18 世紀の妖精物語の生成過程の中にも共同作業としての作品の概念が存在したことを明らかにする。

④ 匿名制の問題の分析

共同作業としての作品の概念は、17—18 世紀フランスで常態化していた無署名の問題と無関係ではない。本研究では、匿名出版の社会的背景や多様な動機を考察し、あるいは匿名制の問題に関連する同時代の論考を調査し、匿名の問題と作者・作品の概念の関係を明らかにすることを目指す。

以上、4 つの観点から問題を総合的に考察することにより、17-18 世紀フランスにおいて、共同作業としての作品という考え方が、哲学的地下文書の中にも、印刷本の中にも存在したこと、複数の匿名・非匿名の複数の作者が一つの作品を作り上げる活動が確かに存在したことを明らかにすることを目指した。

4. 研究成果

(1) 計量文献学・コンピューター言語学の専門家フランチェスカ・フロンティーニとソルボンヌ大学内 CELLF16-18 の研究プロジェクト Observatoire de la vie littéraire (OBVIL) ロベール・シャル研究チームの協力を得て、ロベール・シャルの作とされるフランス理神論の代表的論文『宗教についての異議』に初めて計量文献学の分析を適用した。それにより、これまでオリジナル原稿に最も近く最も純正に近いと考えられてきたミュンヘン写本のなかにも複数の書き手が介入した可能性を数値的に示すことができた。藤原はそれ以前から、

ミュンヘン写本の特に第4ノート(章)に、書き手の複数性を疑わせる要素(後代の書き手にしか書けない情報の紛れ込み、語彙の異質性、構成の不自然さ、序文の内容、等々)を指摘してきたが、そうしたことを一定程度根拠づける数値が得られたことは大きな収穫であった。とりわけ動詞と代名詞の位置関係については、シャルルの他のすべての著作において近代的語順が大勢を占めるのに対して、ミュンヘン写本は古語法の語順が圧倒的に多いことが明らかになった。とはいえそうした明示的な数値は得られた結果の一部を占めるに過ぎず、より確かな結果を出すためには今後も分析方法を工夫してより多くの有効な結果を積み上げていく必要がある。本研究は2022年12月にClassiques Garnier社から刊行されたOBVIL報告書に収録された。

(2) 従来の文献批判の方法で『宗教についての異議』の二種類の写本と、ネジョンとドルバックが同書に加筆して印刷させた『軍人哲学者』を分析することにより、それぞれの異本のなかに、複数の書き手が混在すること、先行テキストを時には削除し、時には改変し、時にはそのまま残しながら、先行テキストと対話し論争する新たな書き手が加わっていることを示した。またそのようなテキストの改変と発展は、ロベール・シャルルの書簡にあるとおり、作者自らが後続の書き手たちに期待したことであったことを明らかにした。本研究成果は、2021年12月にパリで開催されたロベール・シャルル没後300年記念研究集会で口頭発表した(« Écrits livrés à l'aventure : Robert Challe et les écrivains de son temps », Robert Challe et l'aventure à l'occasion du tricentenaire de Robert Challe (1659-1721), 11e colloque international Robert Challe, 10 et 11 décembre 2021, Paris, Sorbonne Université, Maison de la Recherche)。同発表内容は論文としてまとめられ、同研究集会の論文集(Classiques Garnier社から出版予定)の中に収録される。

(3) ヴィルヌーヴ夫人による『美女と野獣』(1740年、匿名で刊行)をその背景描写に注目して分析することにより、同作品が前世紀の文学作品やルイ14世が催した宮廷行事の記録と緊密なテキスト相互関係性を有することを発見した。本作品は、アプレイウス『黄金の口バ』(2世紀)以来の文学伝統のなかで、先行作品との対話をとおして生みだされてきた多数の作品の一つである。哲学的地下文書とは無関係に見えるこうした作品も、無数の引用の織物であり、それらに対話的関係のなかで織りなされてきた共同作品であることがわかる。

(4) 18世紀啓蒙思想を代表する思想家ディドロの約40年にわたる著述活動と周囲の状況をあらためて考察し、『百科全書』を除く自らの主要な著作のほとんどを死後出版にした理由を問い直すことを通して、ディドロの著述活動が匿名、地下文書、共同執筆、後世のテーマと有機的に関係すること、とりわけ哲学的地下文書の様態とディドロの著作物のありようが多くの点で共通することを明らかにした。一人の作者に帰属することなく、複数の共同執筆者に開かれ、対話と論争と再検討に開かれ、常に生成と進歩の過程にあるような作品の動的なありようこそ、ディドロの著作の特徴であり、それが啓蒙思想の原動力の一つとなったのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 藤原真実	4. 巻 518-15
2. 論文標題 「ギンバイカ、オレンジ、花火と動物たち 『美女と野獣』の背景とヴェルサイユ」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『人文学報』	6. 最初と最後の頁 75-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤原真実	4. 巻 516-15
2. 論文標題 18世紀フランス社会と作者 『美女と野獣』とヴィルヌーヴ夫人	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 85 117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤原真実	4. 巻 519-15
2. 論文標題 ディドロと匿名のジレンマ 後世・地下文書・共同執筆	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『人文学報』	6. 最初と最後の頁 89 115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Mami Fujiwara
2. 発表標題 Ecrits livres a l'aventure : Robert Challe et les ecrivains de son temps
3. 学会等名 Robert Challe et l'aventure a l'occasion du tricentenaire de Robert Challe (1659-1721), 11e colloque international Robert Challe, Paris, Sorbonne Universite, Maison de la Recherche. (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Genevieve Artigas-Menant, Francesca Frontini, Mami Fujiwara, Christophe Martin	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Classiques Garnier	5. 総ページ数 25
3. 書名 "Approche numerique des questions d'auctoriarite : le corpus Challe", Bilan general du Labex Obvil.	

1. 著者名 逸見龍生、小関武史、川村文重、奥香織、藤原真実、他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 2
3. 書名 「著作権と出版産業」『啓蒙思想の百科事典』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------